

『懷風藻』 山田三方作詩序の表現から見る「長屋王宅詩宴」

林 宇

一 はじめに

『懷風藻』に収録される、山田三方（以下略して三方）作「秋日於長王宅宴新羅客」（五二番詩）は、延べ十首数えられる集中の同題詩（六二番詩と六八番詩は類題）において、序を有する一作となっている。この詩序は従来、長屋王宅で催された新羅の客人を対象とした宴の具体的な時期を推測する重要な参考とされてきた。小島憲之氏は当該詩序が創作された可能性のある時期を、

- (1) 養老三年閏七月新羅使帰国（七一九）↓長屋王大納言
- (2) 養老七年八月帰国（七二三）↓同右大臣
- (3) 神亀三年七月帰国（七二六）↓同左大臣

の三つの時期に限定し、⁽²⁾「新羅使を宴する大役を考慮すれば、左大臣就任以後が最もふさわしく、この点に於て、神亀三年の秋とみるべきか」と指摘する。この指摘に対して井実充史氏は、⁽³⁾養老三年は

右大臣の藤原不比等が高齢で、大納言であつた長屋王が代役を務め得たことと、養老七年は左大臣が欠員であつたため事実上右大臣が最高位であつたことを踏まえ、左大臣就任前の長屋王であつても十分新羅使人を宴する役を担い得ていたと指摘した。続いて、井実氏は詩題に「左僕射」がないことから、当該詩序は長屋王左大臣就任前の作と判断し、更に調古麻呂作「初秋於長王宅宴新羅客」（六二）の表現が当該詩序の話題の順に即していることを明らかにし、当該詩序は六二番詩と同じく初秋の作で、養老三年（七一九）閏七月の作であると指摘した。その長屋王が大納言の身分で新羅使を宴した場に臨して、三方によって詠作された五二番詩詩序の本文は次のとおりである。

1 君王以敬愛之冲衿、広闊琴樽之賞。

2 使人承敦厚之榮命、欣戴鳳鸞之儀。

3 於是

- 4 琳琅满目、
- 5 蘿薜充筵。
- 6 玉組雕華、列星光於煙幕、
- 7 珍羞錯味、分綺色於霞帷。
- 8 羽爵騰飛、混賓主於浮蟻、
- 9 清談振發、忘貴賤於窓鷄。
- 10 歌臺落塵、郢曲与巴音雜響。
- 11 笑林開鬢、珠輝共霞影相依。
- 12 于時
- 13 露凝旻序、
- 14 風轉商郊。
- 15 寒蟬唱而柳葉飄、
- 16 霜雁度而蘆花落。
- 17 小山丹桂、流彩別愁之篇、
- 18 長坂紫蘭、散馥同心之翼。
- 19 日云暮矣、
- 20 月將除焉。
- 21 醉我以五千之文、既舞蹈於飽德之地、
- 22 博我以三百之什、且狂簡於叙志之場。⁵⁾
- 23 清写西園之遊、
- 24 兼陳南浦之送。
- 25 含毫振藻式贊高風云爾。

【書き下し】

君王は敬愛の冲衿を以て、広く琴樽の賞を闢く。使人は敦厚の
 采命を承け、欣び鳳鸞の儀を戴く。是に於て琳琅目に満ち、蘿
 薜筵に充つ。玉組華を彫りて、星光を煙幕に列べ、珍羞味を錯
 へ、綺色を霞帷に分かつ。羽爵騰飛して、賓主を浮蟻に混へ、
 清談振發して、貴賤を窓鷄に忘る。歌臺塵を落とし、郢曲は巴
 音と雜り響き、笑林鬢を開き、珠輝は霞影と共に相依る。時に
 露は旻序に凝り、風は商郊に転る。寒蟬唱ひて柳葉漂り、霜
 雁度りて蘆花落つ。小山の丹桂、彩を別愁の篇に流し、長坂の
 紫蘭、馥を同心の翼に散らす。日は云に暮、月は將に除かむと
 す。我を酔わしむるに五千の文を以てして、既に飽德の地に舞
 踏し、我を博むるに三百の什を以てして、且つ叙志の場に狂簡
 す。西園の遊びを清写し、兼ねて南浦の送りを陳ぶ。毫を含み
 て藻を振るひ、式ちて高風を贊むるぞ。

【現代語訳】

皇親である長屋王は、尊敬と親しみのある闊達な心で、音楽と
 酒がある楽しみのある宴会を大いに開かれた。新羅の使人は、
 長屋王の誠実で人情に厚い榮譽ある命令を受けてこの宴会に参
 加し、鳳凰のような長屋王の姿を喜び押し戴いている。ここに
 おいて、宴会の場では多くの朝廷で一定の地位があり立場のある
 素晴らしい人が見わたすかぎり集まり、在野の隠者も座に充
 ちている。立派な食器には華やかな模様が彫刻されていて、そ

これらの美しさはまるで煙のような幕に星の光を並べたようだ。

卓上には美食や珍しい御馳走が並べられ、その美しい色彩は霞のような帷に映っている。頭尾と羽翼が付いた酒杯が飛び交われ、主人と賓客は身分の区別なく酒を交わす。席上には清談が起こり、参宴者は身分の高低を忘れ宋処宗の故事のように清談をしている。舞台にはまるで梁上の塵が落ちるほど素晴らしかったと伝えられるその昔の虞公の歌声のような歌が披露され、俗楽を交えた様々な曲が合わさって響いている。談笑では皆笑みを浮かべ、珠のような輝きが霞の光とともに連なっている。

その時、露はまさにこの秋という季節に凝り、風は秋の野外を吹きめぐるっている。秋の蟬が鳴いて柳の葉が翻り、秋雁が渡るのに伴って蘆の花が散っている。劉安とその周辺の文士らのような面々で、別れの愁えの色鮮やかで輝かしい文を作り、曹丕とその周りの有志達のような一座には、同心の者達ならではの蘭の香が漂っている。日がいよいよ暮れるように、月も今にも日と共に留まることなく去ろうとしている。『道德経』（を交えた清談）は私を酔わせ、この徳に飽きる地では既に拝舞を行った。『毛詩』は私の知識を豊富にしてくれ、そしてこの志を述べる場で乱雑な文を振るおう。曹丕の西園の遊びのような（この詩宴を）清らかに文に記し、併せて南浦でのような送別の思いを述べよう。筆を口に含み文才を振るいそれを用いて長屋王の高い気品を讃えるに他ならない。）

当該詩序では、先ず宴の主催者である長屋王の高貴な身分が呈示され、王が尊敬と親しみのある姿勢で客人を招き宴を催したこと、また新羅使人らの視座から捉えた鳳凰のような長屋王の姿を描くことを通して、主人長屋王を賛美する。続いて宴席の場の描写が行われ、立場のある人物も隠者も招かれたこと、並ぶ食器の美しいこと、美食や珍しい御馳走が用意されたことが述べられる。そして、一座は身分の高低を忘れて清談を楽しみ、席上で披露された歌や曲を堪能したことが描かれる。「秋日」を象徴する「露」・「蟬」・「雁」・「蘆」などの景色描写を行い、詩序は後半の送別の主題へと移る。主人長屋王とそれを取り囲む賓客達は、劉安とその周辺の文士達や曹丕とその周辺の有志達に喩えられ、金蘭の契りの如く良き雰囲気の中で送別に因んだ優れた創作が行われたことが記される。そして三方は、宴会の時間が留まることなく過ぎゆくこと、自身が拝舞を行い文を綴る意気込みを示し、「長屋王宅詩宴」を曹丕の西園の遊びに見立てたうえで、新羅使人らを送る思いを南浦の別れに喩える。詩序の最後では改めて主人長屋王の気品の高さを讃える意図が表れている。長屋王宅で催された、新羅使人送別の宴を描いた五二番詩序は、長屋王周辺の文筆活動を知る重要な手がかりである。従って本論文では、五二番詩序に用いられた表現に対する分析を通して、長屋王周辺の文筆活動の一角をかいまみたい。

二 参宴者に関わる表現

― 初唐表現の受容からうかがえる

「長屋王宅詩宴」の構成―

五二番詩詩序の特徴として挙げられるのは、詩序の前半では「琳琅满目」・「蘿薜充筵」・「忘貴賤於窓鷄」・「混賓主於浮蟻」などの諸句が用いられ、参宴者の性質に関わる記述が繰り返され話題として取り上げられている点である。この傾向は、当該詩序と同題である六五番詩詩序だけでなく、他の懷風藻詩序からもうかがえない。従って、本節では五二番詩詩序に見られる参宴者に関わる表現を詳細に考察してみたい。

①「琳琅满目」

先ず、詩宴に参列する賓客の様子を描いた箇所では、四行目に「琳琅满目」という表現が用いられている。「琳琅」は『楚辞』に既に使用例が確認される表現で、

・撫長劍兮玉珥、璆鏘鳴兮琳琅。
(長劍の玉珥を撫すれば、璆鏘と琳琅鳴る。)

(屈原「九歌・東皇太一」『楚辞』卷二)

その王逸注に「璆、琳琅、皆美玉名也。(璆、琳琅、皆美玉の名なり。)」とあるように、本来は美玉を意味する語である。後に、美玉の意から転じて、朝廷で一定の地位を有する、素晴らしい人を喩える表現としても用いられるようになった。

有人詣王太尉、遇安豊、大將軍、丞相在坐、往別屋見季胤、平子。還、語人曰、今日之行、触目見琳琅珠玉。

(人有り、王太尉に詣りて、安豊・大將軍・丞相の坐に在るに遇ひ、別屋に往きて季胤・平子を見る。還りて、人に語りて曰く、今日の行、触目、琳琅珠玉を見たり、と。)

(『世説新語』「容止」第十四)

右の『世説新語』では、ある人物が王衍(王太尉)に謁見した際に、偶然王戎・王敦・王導・王詡・王澄の姿も目にし、それらの人物の素晴らしさを「琳琅珠玉」に喩えているものである。この一文に名が挙がる者は、皆一定の地位に就き立場のある素晴らしい人物達で、「琳琅」はそのような人物の素晴らしさを表現している。五二番詩詩序に用いられている「琳琅」も『世説新語』の例と同じく立場のある人物の素晴らしさを喩えたもので、長屋王宅の宴会に優れた人物らが列席したことを物語っている。

「满目」は目に満ちる意で、当該詩序の「满目」は、一定の地位を有する素晴らしい人物たちが目に満ちるほど招かれたことを指し

ている。「琳琅」と「満目」の何れも初唐より以前に例が見られる表現であるが、小島憲之氏の指摘によれば、当該詩序の「琳琅満目」という組み合わせは、次の三例の表現を念頭に置いた表現のようである。

琳、琅、触目、朗月清風之俊人。(琳琅目に触れ、朗月清風の俊人)

(王勃「秋日遊蓮池序」『全唐文』⁽¹⁾ 卷一八二)

奏金石而満堂、召琳、瑯、而触目。

(金石を奏でて堂に満ち、琳瑯を召ひて目に触る。)

(楊炯「李舍人山亭詩序」『全唐文』⁽¹²⁾ 卷一九二)

故人握手、新知満目。(故人手を握り、新知目に満つ。)

(王勃「秋日楚州郝司戸宅餞崔使君序」『全唐文』⁽¹⁾ 卷一八二)

最初の二例に見られる「琳琅」と「触目」は、先掲『世説新語』の「触目見琳琅」に由来する表現で、「琳琅触目」と「琳琅而触目」とはすなわち一座の立場のある素晴らしい面々を目にしたことを表している。最後の「新知満目」は、「新知」で新たに知り合った知己、「満目」で目に満ちることを言い、新たに知り合った知己が目に満ちるほどいることを表している。つまり、「新知満目」の「満目」も当該詩序と同じ用法となっている。これらの初唐表現と当該詩序の「琳琅満目」の類似から見れば、三方が右の三例のような初唐表現から、当該詩序の「琳琅満目」を導き出したとする小島氏の見解

は妥当と思われる。

②「蘿薜充筵」

次に、五行目の「蘿薜充筵」という表現に注目したい。詳細は後述するが、「蘿薜」は隠者を指す表現で、「長屋王宅詩宴」に隠者が列席していたことを三方は表現している。実際、懷風藻所収の「長屋王宅詩宴詩」を一覧すると、一〇四番詩題に「初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭」とある。一〇四番詩の作者釈道慈(以下道慈)は、その時「竹溪山寺」で隠者として活動していた。隠者と言えば、通常では俗世から離れた生活を送る理想ある者が連想されるが、懷風藻の伝記や史書などに残される道慈関連の記録から見れば、道慈が事実上隠者に相応しい隠遁生活を送っていたかは明らかではない。しかし、一〇四番詩には、「結蘿為垂幕、枕石臥巖中。抽身離俗累、滌心守真空。(中略)僧既方外士、何煩入宴宮。」などの隠遁思想に富む表現が多く含まれ、少なくとも道慈の内心世界では自身を「隠者」として位置づけていたことがうかがえる。本論文では、特に懷風藻において、道慈のように使用表現などから強く隠遁思想がうかがえる人物を「隠者」として扱う。

結果として、一〇四番詩題の「追致辭」からもうかがえるように、道慈は「長屋王宅詩宴」への招待を辞退しているが、一〇四番詩の存在は、長屋王が隠者を自邸の宴に招こうとしていた紛れもない事実を物語っている。つまり、長屋王周辺の文筆活動は、道慈の

ような隠者達が参加出来る幅広いものであった。

改めて当該詩序が用いた「蘿薜充筵」という表現に着目したい。

「蘿薜」は「蘿薜」としても用いられ、植物の「女羅」と「蘿薜」のことで、

若有人兮山之阿、被蘿薜兮帶女羅。

(若に人有り山の阿に、蘿薜を被て女羅を帶とす。)

(屈原「九歌・山鬼」「楚辭」卷二)

に由来する表現である。右の引用部分の王逸注に「蘿薜・兔糸、皆無根、縁物而生。山鬼亦晻忽無形、故衣之以為飾也。(蘿薜・兔糸、皆根無く、物に縁りて生きる。山鬼また忽に無形を晻す、故に之を衣して飾と為すなり。)」とあるように、「蘿薜」「蘿薜」は「山鬼」が衣服としてまとっていたものであった。そこから転じて、「蘿薜」「蘿薜」は隠者の衣服の意として用いられた。「蘿薜」「蘿薜」の使用例としては、初唐より以前に使用例が確認され、

謂宜积巾幽谷、結組登朝、則岩谷含歛、蘿薜起扑矣。

(謂ふに宜しく巾を幽谷に积ぎ、組を結んで朝に登らば、則ち岩谷歛びを含んで、蘿薜起扑せむ。)

(『南齊書』⁽¹³⁾ 卷五四「列伝第三五・杜京産」)

想見山阿人、蘿薜若在眼。

(想ひ見る山阿の人、蘿薜眼に在るが若し。)

(謝靈運「越嶺行溪詩」『芸文類聚』⁽¹⁴⁾ 卷三六「人部二〇・隱逸上」)

臣聞玉為彫楹、不数材於蟠木、丹成繡黼、豈襲冕於蘿薜、
(臣聞く玉彫楹を為すに、材を蟠木に数へず、丹繡黼を成すに、豈に蘿薜に冕を襲はさんや。)

(沈炯「為周弘讓太常表」『芸文類聚』卷四九「職官部・太常」)

などが見られる。『南齊書』の一文は、沈約等が在野の杜京産を推薦する上表文の一部で、「蘿薜」をもつて隠者である杜京産を表現している。二例目の「蘿薜」は『楚辭』の表現を踏まえた表現で、謝靈運が心中に抱く隠者を喩えた表現である。三例目の沈炯の表は、『芸文類聚』の「職官部」に収録された一作で、同じく「蘿薜」は隠者を喩えた表現として用いられている。右の三つの「蘿薜」例は、何れも当該詩序の「蘿薜」の用法と近いものとなる。

また、初唐に入ると、次のような「蘿薜」「蘿薜」例がうかがえる。

若天尊、卑位隔、榮賤途分、使卿士大夫、倚軒裳而傲物、山棲木食、負林壑而驕人。未有能屈富貴於沈冥、雜蘿薜於簪笏。天人坐契、相從雲霧之遊、風雨不疲、高縱琴樽之賞。崔兵曹紫庭公胃、青雲貴人、以鐘鼎不足以致奇才、煙霞可以交名士。(後略)

(若し夫れ尊卑位隔て、榮賤途分かるれば、卿士大夫をして、

軒裳に倚りて物に傲り、山棲木食をして、林壑に負ひて人に驕らしむ。未だ能く富貴を沈冥に屈し、薜蘿を簪笏に雜ふること有らず。天人坐契し、雲霧の遊に相ひ従ひ、風雨疲れず、琴樽の賞を高縦す。崔兵曹は紫庭の公胄、青雲の貴人、鐘鼎は以て奇才を致すに足らず、煙霞は以て名士と交はるべしと以ふ。

（陳子昂「秋日遇荊州府崔兵曹使宴序」『全唐詩』⁽¹⁵⁾ 卷八四）

右の詩序は、陳子昂が荊州府の崔兵曹という名高い人物が催した宴会に列席した際の作である。陳子昂序では、「尊卑」や「榮賤」が明確に分けられている世に於て、卿士大夫は官位に傲り、山棲木食の隠者らは山奥で自分らの気品の高さを驕り、両者は常に対立関係にあつて同じ場を共有することがない現状を冒頭で語る。続いて、高貴な出身で隠者と交流しようとする者もいなければ、隠者の身分で官位ある者の中に雜ざろうとする者もいなかったが、崔兵曹という人物の催した宴により、ようやく官位ある者と隠者とが共に楽しむ場ができたことを述べる。つまり、陳子昂が参宴した崔兵曹宅での宴には、官位ある者も隠者も招かれていた様子がうかがえる。そして、「卿士大夫」・「富貴」・「簪笏」などは官位ある者、「山棲木食」・「沈冥」と特に五二番詩序で使用された「蘿薜」と同義である「薜蘿」は隠者のことを指す表現となっている。

陳子昂序では、傍点を附した箇所のように、五二番詩序が用いた表現や意味と近いものが数々見られる。詳しく述べると、陳子昂

詩序の「尊」と「卑」の対、「琴樽之賞」と「煙霞」からは、それぞれ五二番詩序九行目「貴賤」、一行目「琴樽之賞」、六行目と七行目の「煙」と「霞」と同じ趣旨が確認される。それだけでなく、詩序の前半で紙幅を割き、五二番詩序と同じく列席者の性質を積極的に描こうとする点は注目値する。

更に、初唐の詩序には、

觀夫天下四海、以宇宙為城池、人生百年、用林泉為窟宅。雖朝野殊致、出處異途、莫不擁冠蓋於煙霞、披薜蘿於山水。況乎山陰旧地、王逸少之池亭、永興新交、許玄度之風月。（中略）

永淳二年、暮春三月、遲遲麗景、出沒媚郊原、片片仙雲、遠近生林薄。（中略）宜題姓字、以傾懷抱。使夫會稽竹箭、則推我於東南、崑阜琳琅、亦歸余於西北。

（觀るに夫れ天下四海は、宇宙を以て城池と為し、人生百年は、林泉を用て窟宅と為す。朝野は致を殊にし、出處は途を異にすと雖も、冠蓋を煙霞に擁し、薜蘿を山水に披ざるは莫し。況や山陰の旧地は、王逸少の池亭にして、永興の新交は、許玄度の風月なるをや。（中略）

永淳二年、暮春三月、遲遲なる麗景、出沒して郊原に媚び、片片なる仙雲、遠近して林薄に生ず。（中略）宜しく姓字を題し、以て懷抱を傾くべし。夫の會稽の竹箭をして、則ち我を東南に推し、崑阜の琳琅をして、亦た余を西北に歸らしめむ。）

〔王勃「三月上巳祓禊序」〕〔正倉院本王勃詩序訳注〕⁽¹⁶⁾

の如き「薜蘿」例も見受けられ、文末に「琳琅」が見える点も注目に値する。右の詩序では「永淳二年」（六八三）と創作の年が記されるが、王勃は上元三年（六七六）に既に死しているため、「三月上巳祓禊序」は王勃の自作であるかどうか疑問視されている一作でもある。しかし、この詩序が当時既に日本に舶来していたことを踏まえれば、王勃の実作であるかどうかにかかわらず、三方が十分参照し得た一作であることは紛れもない事実である。

その内容を詳細に見ると、王勃序は「天下」と「宇宙」という大きな外観からの詠嘆から始まり、「人生百年」は「林泉」を以って住みかとする隱遁思想が示されている。そして、仕官する者と野にある者とは大きく異なるが、仕官する者と在野の者とが隱遁の世界を好まないことはないと言えらる。つまり、王勃序では仕官する者と在野の隠者らが共に詩宴に集ったことを表している。特に、官職についている者を表す「冠蓋」の対には、五二番詩序にも用いられた「薜蘿」が用いられ、隠者が列席したことを示す。陳子昂序と王勃序が紙幅を割いて、参宴者の身分を描こうとする姿勢、そしてそれらに見られる五二番詩序との表現上の類似から見れば、三方は右の初唐詩序を参照して創作を行ったものと思われる。

三方が長王宅で催された新羅使人送別の詩宴に際して、これらの表現を大いに参照していたことは、三方自身が参加者の身分の高低

を積極的に描こうとしていた姿勢の表れでもある。それは実際三方が列席した長屋王宅詩宴で、「琳琅」で表現される立場のある人物すなわち相應の地位を有する者と、「薜蘿」が示す隠者らが同じ場で宴を楽しんだことをも意味する。異なる身分の者が和氣藹々と宴を共にし、身分を超越した文学創作の場が設けられた「長屋王宅詩宴」を表現しようとした時、三方は自然と陳子昂序や王勃序に表現を求めたものと思われる。

③「忘貴賤於窓鷄」

続いて、一座の身分に構わず清談を楽しむ様子を描く第九行目では、「忘貴賤於窓鷄」という一句がうかがえる。「貴賤」とは身分の高い者と身分の低い者を指す表現であり、初唐より以前にも用例が確認される表現である。しかし、「忘貴賤」という字句は、小島大系⁽¹⁷⁾が掲げる、

千載契風雲、一言忘賤貴。（千載風雲を契り、一言賤貴を忘る。）

（駱賓王「夏日遊德州贈高四」〔全唐詩〕卷七七）

が最も近い。右の駱賓王詩の「忘賤貴」は、通常であれば「貴賤」となるところであるが、押韻の都合上「貴賤」を「賤貴」としている。次に、一句の末尾にある「窓鷄」は、

『幽明録』曰、晋兖州刺史沛国宋処宗、嘗買得一長鳴鶏、愛養甚至。恒籠著窓間、鶏遂作人語。与処宗談論、極有言智、終日不輟。処宗因此言巧大進。

〔『幽明録』に曰く、晋の兖州刺史沛国の宋処宗、嘗て一長鳴鶏を買ひ得、愛養甚だ至る、恒に窓間に籠著し、鶏遂に人語を作す。処宗と談論し、極めて言智有りて、終日輟めず。処宗此に因り言功大進す。〕
〔『芸文類聚』⁽¹⁸⁾ 卷九一「鳥部中」〕

の故事に由来する表現であり、宋処宗は鶏と日夜清談することによって巧みになったため、宋処宗の故事を以って、清談が意味されるようになった。無論、宋処宗の故事を表す表現は「窓鶏」に限られず、小島大系が掲げる、

霞明春牖、即対談鶏。（霞春牖に明く、即ち談鶏に対す。）

（王勃「梓州慧義寺碑銘」『全唐文』卷一八四）

泛蘭英於戸牖、座接鶏談。

（蘭英を戸牖に泛かべ、座して鶏談に接す。）

（駱賓王「冒雨尋菊序」『全唐文』卷一九九）

の「談鶏」や「鶏談」も「窓鶏」と同じく宋処宗の故事を踏まえた表現である。これらの宋処宗の故事をもととする表現は、初唐詩から頻繁に用いられるようになる。前述の駱賓王詩に用いられている

「忘貴賤」の字句の存在と併せて考えれば、「忘貴賤於窓鶏」一句は、初唐表現を色濃く反映している一句といえる。

五二番詩詩序において、三方はなぜここまで参宴者の性質に関わる表現を積極的に初唐表現から摂取し、用いたのか。三方個人の経歴と初唐表現から見いだせる詩宴意識から、「長屋王宅詩宴」の在り方を探究したい。

三 「長屋王宅詩宴」の在り方

まず史書などに残る三方の経歴を辿ってみたい。

三方は生没年未詳で、名は三方の他、御形（御方）の記述も見受けられる。『日本書紀』⁽¹⁹⁾ 持統天皇六年（六九二）十月、務広肆を授かる。同条によれば、かつては新羅に沙門として留学したことがあった。『続日本紀』⁽²⁰⁾ 慶雲四年（七〇七）四月ではその学問を賞され、布・鍬・塩・穀を授かっている。時に正六位下。和銅三年（七一〇）正月、従五位下に昇進し、周防国守に任命される。養老四年（七二〇）正月、従五位上に昇進する。養老五年（七二一）退朝後、山上憶良等と共に東宮（後の聖武天皇）に侍するように命じられ、同月、文章師範の功によって純十五疋・糸十五紵・布三十端・鍬二十口を授かっている。養老六年（七二二）四月、周防国守在任中に官物を盗んでいた事実が発覚したが、その学問面での長年にわたる貢献に免じて罪を問われなかった。また、『藤氏家伝』⁽²¹⁾（上）では、紀朝臣

清人・葛井連廣成・高丘連河内・百済公倭麻呂・大倭忌寸小東人等と共に「文雅」として名を列している。

これらの記録によれば、三方は絶えずその学問を賞され、後に東宮に侍した人物で、正六位下であったことが判明する慶雲四年（七〇七）から養老四年（七二〇）の一三年以上に及ぶ年月で、三方の官位は三段階上がっている。「選叙令」によれば、優秀であれば最短、「六考」で官位は四段階昇進できることになるが、一三年以上で三段階昇進した三方は、官位の昇進面ではいたって普通であったということになる。また、当該詩序が創作された時点で、三方は従五位下と相対的に高位にあった。つまり、詩序で積極的に紙幅を割いて参宴者の性質を描いたことは、決して三方の身分が低かったからではないことを意味する。

ここで、懷風藻所収の「長屋王宅詩宴詩」を確認すると、当該詩序以外の「長屋王宅詩宴詩」にも、参宴者の性質を表す表現が使用されている。

鶉衣追野坐（鶉衣野坐を追ひ）

（「初春於左僕射長王宅讌」七五番詩）

右の百済和麻呂作の「初春於左僕射長王宅讌」詩に用いられている「鶉衣」という表現は、本来鶉の羽の粗末な様子からぼろぼろの衣服の意で、後に身分の低い官人の喩えとして用いられるようになった

た表現である。この一句は、百済和麻呂が列席した、長屋王宅で催された初春の詩宴にも、身分の低い下級官僚が招かれていたことを意味している。

現に、懷風藻所収の「長屋王宅詩宴詩」に関わる人物の経歴と極位極官を一覧すると、計一六人見られる「長屋王宅詩宴」参加者の中、詩宴参加時五位以下であった人物は、

従五位下大学助背奈王行文（七二七年従五位下）

皇太子学士正六位上調忌寸古麻呂

正六位上刀利宣令

大学助教従五位下下毛野朝臣虫麻呂（七二〇年従五位下）

従五位下備前守田中朝臣淨足（七三四年外従五位下）

正六位上但馬守百済公和麻呂

外従五位下大学頭箭集宿禰虫麻呂（七三一年従五位下）

外従五位下大学頭塩屋連古麻呂（七三九年従五位下）

の八人が数えられ、確実に身分の低い官僚が長屋王宅の宴会に招かれている。懷風藻の「長屋王宅詩宴」以外では、唯一極位が「従六位上」の大学博士田辺百枝が天皇主催の侍宴に招かれている（「春苑応詔」三八番詩）のを除き、天皇が主催した宴会で詩作を残している人物らの極位はことごとく五位以上となっている。それは、長屋王が積極的に身分の低い官僚を招いていた証でもある。

ここまで確認できたように、事実上長屋王宅には身分の低い下級官僚や、官職に就かない隠者などが積極的に招かれ、「長屋王宅詩宴」を構築していた。五二番詩序で、参宴者の性質が積極的に描かれたのは、このような長屋王サロンの実態を表そうとしていたからと思われるが、なぜ五二番詩序では敢えて初唐表現が用いられたのか。

改めて第二節「蘿薜（薜蘿）」項で掲げた二つの初唐詩序を振り返りたい。一部を再掲するが、陳子昂詩序の主張は詩序冒頭に凝縮されている。

若夫尊卑位隔、榮賤途分。使卿士大夫、倚軒裳而傲物、山棲木食、負林壑而驕人。未有能屈富貴於沈冥、雜薜蘿於簪笏。

右の一文では、今までの世の中では「尊卑」と「榮賤」の区別が激しく、「卿士大夫」のような官人と「山棲木食」のような隠者らは、それぞれの集まりを重視し、相交わって交流することはなかったことが唱えられている。その隔たりを越え、両者の交流の場を実現させたのは陳子昂詩序が創作された宴の主人崔兵曹であり、理想的な文作の場を設けた主人崔兵曹の試みを、陳子昂は詩序の参宴者の性質を描くことを通して賛美している。陳子昂序の「尊」と「卑」は、具体的な官位の上下関係や官職があるか否かではなく、「尊卑」という概念によって区分された異なる集団を表している。そして、

「尊」と「卑」の境を凌駕することを理想とする理念を陳子昂は思い描いていたことになる。

また、王勃詩序に関しても同様の指摘が出来る。

雖朝野殊致、出處異途、莫不擁冠蓋於煙霞、披薜蘿於山水。

王勃詩序の一文では、朝廷と在野の者、仕官する者と退く者とは大きく異なるが、官職ある者でも隠遁の世界に入らない者はいないと唱え、両者の渾然一体となることを主張する。陳子昂詩序が描くような理想的な場を、王勃詩序でも確認できたことになる。

更に、初唐の宋之問詩序には次の二句が見られる。

環坐三尺、起君子之風。（環坐三尺、君子の風を起こし。）

（宋之問「袁侍御席餞永昌独孤少府序」『全唐文』卷二四一）

右の二句では、参宴者が「環坐」している様子を描き、そこに「君子之風」が生じていることを言う。通常であれば、一つの詩宴に列座する者は、身分の高低によって座の配列や方角、間隔などが厳密に区分され、参宴者全員を見渡せる「環坐」は実現されない。しかし、宋之問が詩序で描く詩宴では、座の分別が除かれ、一座全員を見渡せる理想的な創作の場が設けられていたことになる。つまり、身分に限定されない創作の場に巡り合わせたことを、宋之問は「起

君子之風」と称賛しているのであり、宋之問詩序でも陳子昂詩序や王勃詩序で確認された「尊」と「卑」の境を凌駕することを理想とする理念を追及する姿勢が表れている。

陳子昂詩序、王勃詩序、そして宋之問詩序。これらの詩序からは共通して、尊卑関係や上下関係を超越した、様々な身分の者が同一の詩宴で対等の交流の場をもてる、すなわち「尊」と「卑」の境を凌駕することを理想とする理念に対する追求がうかがえた。初唐の著名な文人らが思い描くこのような理念は、長屋王という人物が主催する文学サロンで実現され、上級官人、下級官人、在野の隠者、外交使節が自由に詩作を披露できる「長屋王宅詩宴」が存在していた。初唐詩序に見出せる地位の上下を超越する理念は、早い段階から懷風藻の作品に受容され、そのことは既に高松寿夫氏の論に指摘がうかがえる。五二番詩序で初唐表現が巧みにくみ取られ、参宴者の性質を表すに際して、それらの初唐表現が駆使されたのは、初唐詩序に見られた「尊」と「卑」の境を凌駕することを理想とする理念を表すためであり、同時に「長屋王宅詩宴」が初唐作品に共通するそのような理念実現の場となっていたからである。

そのような理想的な「長屋王宅詩宴」は結果として、五二番詩序や他の懷風藻詩の表現によって書き留められ、現在に至るまでその実態を物語っているのである。

四 おわりに

本論文では、懷風藻所収の山田三方作五二番詩序の表現を詳細に見つめ、特にその参宴者の性質を描く傾向に焦点をあて考察を行った。その結果、参宴者の性質を描く箇所が積極的に用いられた表現が、初唐の痕跡に富んでいることが明らかとなった。また、それら初唐表現が使用された背景には、初唐の著名な文人らが描くいくつかの作品に共通してうかがえる、身分の高低を超越した創作の場が、「長屋王宅詩宴」で実現されていた事実があることが確認された。

従来は上下関係、尊卑関係に制限されることがなく、実際下級官人や在野の隠者を自邸に招くことで催された数々の「長屋王宅詩宴」は、多くの文人達力量発揮の場となった。そして、その理想的な文筆活動の場となった「長屋王宅詩宴」は、五二番詩序を始めとする懷風藻詩に記録され、長屋王サロンの在り方を示している。これら「長屋王宅詩宴詩」は、長屋王サロンで行われた文筆活動の実態を知る重要な手がかりとなっている。

今後の研究では、「長屋王宅詩宴詩」の表現などを一層掘り下げて行き、引き続き長屋王周辺の文筆活動の在り方を追求していきたい。

注

- (1) 小島憲之校注『懷風藻』（日本古典文学大系六九、岩波書店、一九六四・二）。
- (2) 小島氏が限定する三つの時期は、恐らく『続日本紀』などに残される、秋に新羅使人が宴された記録に依拠しているものと思われる。
- (3) 井実充史「於長王宅宴新羅客」詩の論（『上代文学』第73号、上代文学会、一九九四・一一）。
- (4) 本論文の懷風藻本文は寛政版本を底本とし、来歴志本、陽春廬本、尾州本、脇坂本、松平本、鍋島本、昌平坂本、群書類聚本、天和版本、宝永版本などによって校訂を行ったもの。訓み下し・現代語訳・傍線は本論文執筆によるもの。また、他の漢籍などの引用本文や訓み下しを含め、字体を私に通行字体に改めた。以下同じ。
- (5) 底本「劍」。来歴志本・昌平坂本・群書類聚本に従い「叙」に改めた。
- (6) 林新註（林古溪『懷風藻新註』（明治書院 一九五八・一一）や小島大系（注（一）書）は使人（小島大系は「客」としているが、恐らく「新羅客」のこと）を讀えた表現とするが、詩序全体から見ても注（三）論文で井実氏が指摘するように、長屋王に対する表現と考える方がより適切と思われる。
- (7) 星川清孝著『楚辞』（新釈漢文大系第34巻、明治書院、一九七〇・九）。以下同じ。
- (8) 王衍は西晋（二六五年—三一六年）の名士で、後に重臣を務めた人物。安豊は王衍堂兄の王戎のことで竹林七賢の一人でもあった名士。大將軍は王衍の堂弟である王敦のことで、晋武帝の婿となった人物。丞相も王衍の堂弟にあたる王導のことで、東晋の開国を手助けした人物。季胤は王衍の弟である王詡のことで、後に『鬼谷子』を著作している。平子は季胤と同じく王衍の弟にあたる王澄のことで、清談を愛したことで知られる。
- (9) 目加田誠著『世説新語（下）』（新釈漢文大系第78巻、明治書院、一九七八・八）。
- (10) 小島憲之『上代日本文学与中国文学』下（塙書房、一九六五・三）。

- (11) 『全唐文』（上海古籍出版社、一九九〇）。以下同じ。
- (12) 小島氏は「崇文館宴集詩序」とするが、正しくは次篇の「李舍人山亭詩序」。

- (13) 『南齊書』（中華書局、一九七二）。
- (14) 『芸文類聚』（上海古籍出版社、一九九九）。以下同じ。
- (15) 『全唐詩』（中華書局、一九六〇）。以下同じ。
- (16) 『正倉院本王勃詩序訳注』（日中文化交流史研究会編、翰林書房、二〇一四・九）。
- (17) 前掲注（一）書。
- (18) 『幽明録』原本は散逸。『芸文類聚』所収の本文に依る。
- (19) 坂本太郎「ほか」校注『日本書紀』下（岩波書店、一九六五・七）。
- (20) 青木和夫「ほか」校注『続日本紀』二（岩波書店、一九九〇・九）。以下同じ。
- (21) 竹内理三編『寧楽遺文』下（東京堂、一九六二・一一）。
- (22) 前掲注（一）及び同書「詩人小伝」に依る。作者名は『懷風藻』の詩番号順に掲げた。
- (23) 高松寿夫「下毛野虫麻呂「秋日於長王宅宴新羅客詩序」について」（『早稲田大学日本古典籍研究所年報』第15号、早稲田大学日本古典籍研究所、二〇一一・三）。

付記

本論文における漢籍例の検索にあたっては以下のデータベースを参考として用いた。

寒泉 <http://skqs.lib.ntnu.edu.tw/dragon/>
 搜韻 <https://sou-yun.cn/index.aspx>
 中国哲学書電子化計画 <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb>
 漢籍電子文献 <http://hanji.sinica.edu.tw/>